

平成三十二年度

富山大学人文学部 特別入試

推薦入試

小論文

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、この表紙を開かないこと。
- 二 試験問題は二枚、解答用紙は二枚、下書き用紙は二枚である。
試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 四 解答はすべて解答用紙に記入すること。指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 五 配付された試験問題および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
29.11.29
富山大学

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

KYを読む？

二〇〇九年 春

ノーベル賞を受賞したあの益川敏英さんは、空気をかき混ぜるのが得意である。もしノーベル賞を受賞しておられなかったら、空気をかき混ぜるといふより空気を乱すと言われていたかもしれない。事実、議論好きな益川さんはその昔、「いちやもんの益川」という綽名あだなをつけられていたという。

ちなみに奥様も、問われればかならず絶妙の外しの対応をなさる。夫ともども初の海外旅行の感想を訊かれても、「スケジュールが混んでいてなんだか……。もういちど連れていってもらわない」と応じて、周囲を笑わせた。

空気を軽やかに外すこと、逸そらせること、これが会話の妙である。空気が一変し、会話はさらに愉快に広がってゆく。

おふたりはまことに「空気を読む」妙を心得ていらっしやる。だが、世の中は逆で、おなじ「空気を読む」といっても、空気を外すのではなく、空気に合わせるのに腐心するばかり。

KY（空気が読めない）という、なんの捻ひねりも陰りも屈折もない、薄っぺらな隠語がある。こんな底の浅い隠語なら、向けられたところで傷もきつと浅いに決まっている。

「空気が読めない」という隠語はもちろん、「空気を読め」というメッセージにはかならない。

「空気を読む」、それじたいは悪いことではない。利害が複雑にからまる難儀な事態ほうぎなじたいに逢着ほうちやく（注一）したときは、みなそれぞれに空気を読まなければ、まとまるものもまとまらない。「落とどころ」というのも、そうしたなかでこそ予感され、たぐり寄せられる。

あるいは、時代の空気を読むことに長けていなければ、政治は動かせない。時代を見通すことも、表現することもできない。政治家に、ジャーナリストに、芸術家に求められているのも、こうした「（時代の）空気を読む」力だ。

けれども、KYは、そうしたさばけた大人の知恵としての「空気を読む」とはちよっとおもむき異なる。散乱するノイズのそれぞれにしっかり耳を傾ける前に、ノイズをないものにして、まずはとにかく秩序を維持しようという衝迫きんぱくが、先にある。KYなる言葉を編みだした若い人たちについていえば、教室という小さな空間で、あるいは「友だち」という小さなサークルのなかで、空気を読まないとはじき出されるという恐怖につきまとわれて、空気をいたずらに読みすぎているともいえる。

そんな彼らにはむしろこう言いたい。空気がなんて読まなくていいのだ、と。それよりもむしろ、じぶんが「空気」と思っているものがいかに狭隘きょうがいなものかを知ることのほうが大事だ、と。「空気」をより大きな文脈に置きなおして、同時代の「空気」を、未だ見通いまだしていない世の中の仕組みをも含めて立体的にとらえる、その訓練をすべきだ、と。軽々に空気を読むことは、むしろ

しないほうがよいのである。

政局についてもおなじこと。行動にあたって近場の空気を読みすぎるからこそ問題なのだ。

ヘーゲルは『法の哲学』（一八二一年）のなかでこう述べていた。「だれでももともとその時代の息子であるが、哲学もまた、その時代を思想のうちにとらえたものである」と。このように、思想というかたちでとらえられた時代こそ哲学なのだとすれば、哲学はだれもがほのかに感知しているのにまだよくつかめていない、そういう時代の構造の変化を、まずは「空気」として析出（注二）することから開始されるはずだ。そして未知の概念をそこに挿入することで、その変化にある立体的な形を付与するものであるはずだ。

すぐれたコマージュのコピーというのも、じつはおなじような結晶作用を、こんどは概念によつてではなく、フィーリングというかたちで感覚的に引き起こさせる。皮膚感覚を全開して、時代の、現象としては微細だがドラステイック（注三）な変化をキャッチしたコピーは、たった一言で時代のエッセンスを言い当てる。

いずれにせよ、時代の水中に深く潜り込んだ視線からは、水面は揺らめき、ちがう顔を見せる。空気を読むために空気をかき混ぜるといふのは、たぶんそういうことなのだろう。

（鷲田清一『パラレルな知性』晶文社、二〇一三年）

（注一）逢着……でくわすこと。

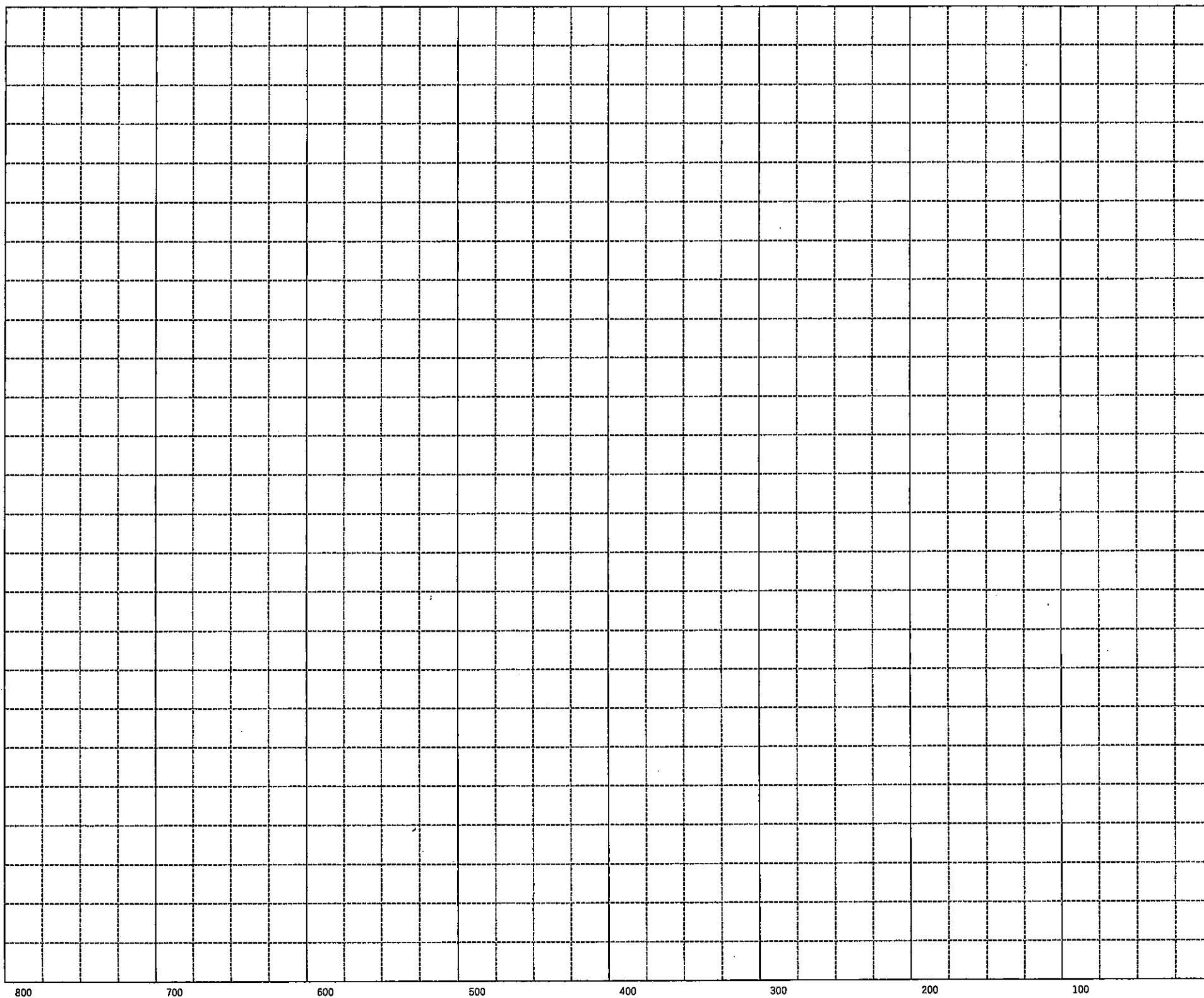
（注二）析出……溶液や化合物からある物質を結晶として取り出すこと。

（注三）ドラステイック……徹底的。激しい。

問一 傍線部の、著者が「読まなくていいのだ」と言っている「空気」について、二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 著者はどのような「空気」を読むことが大切だと考えているのか、簡潔にまとめたいうえで、著者の考えについて、あなたの考えを述べなさい（八〇〇字以内）。

下書き用紙（解答用紙ではありません）



下書き用紙（解答用紙ではありません）

